

2016年度第2回ラインホールド・ニーバー研究会報告
『ラインホールド・ニーバーにおける集団の罪』
——人間の本性と歴史の終末の観点から——
長倉 基氏（日本基督教団藤沢北教会牧師）



上段：会場内の様子 下段：長倉基先生 高橋義文研究代表

2016年12月5日（月）聖学院本部新館2階会議室において、2016年度第2回「ラインホールド・ニーバー」研究会が行われた。日本基督教団藤沢北教会牧師の長倉 基氏に、標記の題にてご報告いただいた。参加者は12名であった。以下に概要を記す。

長倉氏は、東京神学大学大学院での修士論文で取り上げたラインホールド・ニーバーの「集団の罪」について、その特徴や重要性の考察、そしてニーバーの贖罪論、歴史観、終末論における個人の罪と、集団の罪についての違いと意義について報告された。前半は、まずニーバーの罪論について説明され、その上で集団の罪について報告された。後半は、ニーバーの歴史観、終末論を確認した上で集団の罪がどのように関わるかを報告された。

ニーバーは、人間存在に対して自然と精神あるいは有限性と自由という弁証法的理解をしている。そして、神への逆反が傲慢という罪であり自己栄化へ導くとする。そして、罪の概念を以下の四つに分類する。(a) 力の傲慢 (b) 知的傲慢 (c) 道徳的傲慢・独善の罪・自己義認 (d) 精神的・宗教的傲慢

そして、最後の精神的・宗教的傲慢こそ傲慢の罪の究極的な形であるとする。

ニーバーは個人の罪と集団のそれに一定の区別を設ける必要を訴える。集団の傲慢の源は個人の

態度にある。しかし、以下の理由により、集団の傲慢と個人の傲慢を区別することが重要だと考える。ひとつには、集団は個人を支配する権威をもち、無条件的な要求を個人にするようになり、個人はそれに従ってしまうという現象が起こるからである。もうひとつは、集団の傲慢からくる見せかけや主張は個人のそれらよりも大きいからであるとする。普遍的価値を実現しようとする集団は、個人の生き残りや価値の実現のための究極的な存在であると言う主張をもって、無条件的な忠誠を求める。つまり、集団は、個人に対して偶像礼拝の欲求を実現させるという究極的な罪の形があらわれる。それゆえに、ニーバーはこの集団の傲慢が人間の罪の最も悲惨な形であると主張する。

最後に長倉氏は、集団の運命についての終末論的考察をされ、ニーバーの終末論の要点は、現在の終末論と未来的終末論の弁証法で示されるところの終末に与えられ、集団を含む人間の歴史における歩みはキリストの十字架の贖いにより、自己栄化ではなく、神の超越を認める悔い改めにおいて人間はその意味をとらえる。そして歴史を超越する神が歴史の終わりに、すべてを成就させ意味のすべてを明らかにするという信仰を持って、人間はこの歴史を歩むのである。と語り報告は終了した。

報告の質疑では、「集団」に教会のことが触れられていない。ということについて議論が交わされ、ニーバーが集団を語っている対象は、国家のことが中心であるとの説明がなされた。

（文責：鈴木 憲二 [すずき・けんじ] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士前期課程）